

## 「許されざる者」

◆◆◆◆◆

2013(平成25)年9月14日鑑賞く梅田ブルク7>

監督：李相日

アダプテーション脚本：李相日

釜田十兵衛（北海道へ逃れ落ちた幕府軍の残党）／渡辺謙

大石一蔵（鷺路村長兼警察署長）／佐藤浩市

沢田五郎（アイヌ出身の若者）／柳楽優弥

馬場金吾（十兵衛の昔の仲間）／柄本明

なつめ（鷺路村の酒場の女郎）／忽那汐里

お梶（なつめと同じ酒場に身を置く年上の女郎）／小池栄子

北大路正春（長州出身の勤皇の志士）／國村隼

秋山喜八（女郎宿を兼ねた酒場の亭主）／近藤芳正

堀田佐之助（卯之助の兄）／小澤征悦

堀田卯之助（佐之助の弟）／三浦貴大

姫路弥三郎（小説家）／滝藤賢一

2013年・日本映画・135分

配給／ワーナー・ブラザース映画

## &lt;名作映画には輸出版もあれば、輸入版も！&gt;

黒澤明監督の『七人の侍』（54年）が『荒野の七人』（60年）として、『用心棒』（61年）が『荒野の用心棒』（64年）として、輸出されたことは日本映画の誇り。しかして今般、李相日監督がクリント・イーストウッド監督・主演の名作『許されざる者』（92年）を20年ぶりに日本に輸入した。時代設定と登場人物たちの基本的枠組を変えないまま、舞台を明治維新直後の蝦夷地（=北海道）に設定し、日本版『許されざる者』を作り上げたわけだ。私の最も印象に残るクリント・イーストウッドは『荒野の用心棒』、『夕日のガンマン』（65年）、『続・夕日のガンマン』（66年）等の「マカロニ・ウェスタン」に出演していた若き日の俳優クリント・イーストウッドだが、その後彼は監督としての才能を発揮し、83歳の今日まで次々と名作を作り続けている。『許されざる者』は彼が62歳の時の作品だが、そこではそれまでのハリウッドの「勸善懲惡」的な西部劇とはまったく異質の、善悪両面をあわせ持った人間たちの、資金稼ぎをめぐる営みがものすごい深みをもって描かれていた。

オリジナル版でクリント・イーストウッドが演じた主人公は、かつて殺人鬼と恐れられた男ウィリアム・マニーだったが、今回の日本版で渡辺謙演じる主人公・釜田十兵衛は、かつて「人斬り十兵衛」と恐れられた男・釜田十兵衛だ。李監督が『硫黄島からの手紙』（06年）（『シネマルーム12』21頁参照）でクリント・イーストウッドと組んだ渡辺謙を主人公の十兵衛役に起用したのは当然だが、さて、オリジナル版と日本版に見る俳優クリント・イーストウッドと俳優・渡辺謙の対比は？

幕府軍との戦いの中で、人を斬り続けながら何とか生き延びてきた十兵衛は今、蝦夷地の人里離れた寒村で二人の子供たちとひそり暮らしていた。そんな十兵衛に賞金稼ぎの話を持ち込んできたのは、かつて幕府軍伝習歩兵隊と一緒に戦った昔の仲間、馬場金吾（柄本明）だ。「二度と人は殺さない！」、亡き妻とそう約束した十兵衛はもちろんそんな話を拒否したが、やせ細った土地で今年の冬さえ越すことができない現状を考えると・・・。

## &lt;キャラ比較の妙と、第三の男の存在感に注目！&gt;

オリジナル版では、①クリント・イーストウッドが演じたウィリアム・マニー、②ジーン・ハックマンが演じたリトル・ビル・ダゲット、③モーガン・フリーマンが演じたネッド・ローガンの3人が主役だった。しかし、本作で①ウィリアム・マニー役に相当するのが、渡辺謙演じる釜田十兵衛、③ネッド・ローガン役に相当するのが、佐藤浩市演ずる鷺路村の初代村長兼警察署長を務める絶対的な権力者・大石一蔵だ。十兵衛を含む3人の主役たちのキャラクターは、舞台が明治維新直後の蝦夷地と設定されているにもかかわらず、オリジナル版における3人の主役たちとほぼ同じ。その対比の妙が本作の妙だから、まずはそれを十分に味わってもらいたい。

そのキャラクターの比較対象についてはパンフレットで詳しく分析されているし、本作を味わうについての大前提になるものだから、しっかりあなた自身で勉強してもらうこととして、ここではそれには触れない。ただ一言付け加えておきたいのは、本作で賞金稼ぎに参加する「第三の男」となる、アイヌ人と日本人との混血の若者・沢田五郎（柳楽優弥）のキャラと存在感だ。彼はオリジナル版における生意気な若者ザ・スコフィールド・キッドの日本版だが、李監督は本作にアイヌ民族への差別という大きなテーマを加味したため、必然的にこのアイヌの若者の存在感が大きくなっている。渡辺謙、柄本明、佐藤浩市という3人の名俳優に比べれば、いくらは枝裕和監督の『誰も知らない』（04年）で、カンヌ国際映画祭最優秀男優賞を14歳という史上最年少で受賞した経験があっても、柳楽優弥の演技はまだまだ。パンフレットによると、李監督から「五郎ってもっとバカなんじゃないか」とか、「愛嬌、愛嬌！」と言われ続けながら、また、怒られっぱなしで五郎役を演じたらしいが、さて、その出来は？ 十兵衛と金吾の前に突然現れ、賞金稼ぎに加わりたいと申し出た五郎は、ピストルを振り回しながら「俺は5人も人を殺したんだぜ！」と自慢していたが、さて、その実態は・・・？

## &lt;廃刀令と権力の移行をどう考える？&gt;

豊臣秀吉は1588年に「刀狩令」を出して、百姓たちの武器所有を禁止した。その約300年後の1876年、明治政府は「廃刀令」を発布して士族たちの帯刀を禁止した。本作を観た翌日、9月15日のNHK大河ドラマ『八重の桜』は、新島襄が開いた同志社に熊本の洋学校の生徒たちが大量に入学し、「熊本バンド」の結束力と優秀さを示す面白いストーリーだった。そして、廃刀令が出された1876年の10月には、熊本洋学校を敵視していた熊本の士族たちは、明治政府に対して「神風連の乱」を起こしたが、直ちに鎮圧された。しかし、士族たちの反乱は「秋月の乱」「萩の乱」へと広がり、ついには1877年の「西南の役」へとつながっていくことになった。

『許されざる者』に登場する元長州の侍の北大路正春（國村隼）は、そんな廃刀令制定後に千円という賞金稼ぎのために大小2本の刀を差して鷺路村にやって来た男だから、もともとはかなりヘンな奴。小説家の姫路弥三郎（滝藤賢一）を同行して自信満々に乗り込み、秋山喜八（近藤芳正）が経営する酒場に陣どって、薩摩のバカさ加減を徹底的に放言していたが、時代が大きく変わった今、こんな男が生きる道はあるの？ 9月16日付産経新聞は、テレビによく登場していた東洋大学の朱建栄教授が7月中旬に中国当局に拘束されたことを報道するとともに、習近平体制になった中国では、「温和派」とされる対日関係者・記者らの知識人の拘束が相次いでいることを報じた。さて、今、中国では一体何が起こっているの？

今、一蔵は廃刀令を活用して徹底的に刀狩りを行っていたが、彼だってもとは薩長側の下級武士。したがって刀を命として、あの激動の時代を生き抜いてきたわけだが、北辰一刀流の達人であった坂本竜馬が意外にもさっさと刀に見切りをつけて西洋式のピストルに興味を示したように、一蔵もまた変わり身が早かったらしい。

しかし、それは、坂本竜馬や勝海舟のように新しい時代を見据え、世の中を改革していくための変わり身ではなく、自分の保身や権力維持のための変わり身だったからやばい。そんな百戦錬磨の一蔵に比べれば、剣術の腕に自信があり、今でもその腕で生きていけると考えていた正春とのレベルの差は明らかだ。李監督が描くそんな本作のエピソードを、さて、あなたはどう読み解く？

## &lt;娼婦たちのパワーは洋の東西を問わず共通&gt;

お梶（小池栄子）たち娼婦が懸命に貯めこんだお金から、千円という懸賞金を出してまで犯人を「殺してくれ！」という行動に出たのは、娼婦仲間のなつめ（忽那汐里）が客の手によって顔を切り刻まれるというどんでもないことになつたためだ。その犯人は堀田佐之助（小澤征悦）と堀田卯之助（三浦貴大）の兄弟だが、「あそこが小さい」と言われたぐらいで、そんな無茶をしてはダメだろう。そんな堀田佐之助と堀田卯之助に対して、「使いものにならなくなつた女郎の代わりに、馬を6頭差し出したら無罪放免にしてやる」という裁きを下した一蔵はある意味利口だが、それにお梶たちが納得できないのは当然。そこで娼婦たちが賞金稼ぎを募集する決心をしたというストーリーはオリジナル版と全く同じだから、娼婦たちのパワーは洋の東西を問わず共通だ。

そんなクリスマスの戦いはかなり異色なので、あなた自身の目でしっかりとと・・・。それは金吾の復讐のため、としか考えられないが、さてあなたはそんな十兵衛の生きザマをどう読み解く？

本作のラストにはなつめのナレーションが流れるが、それは「十兵衛を見たのは、あの日が最後だった」から始まる。十兵衛は鷺路村へ「殴り込み」をかける前に、しっかりと千円の賞金を2人の子供に届けてくれと五郎に言い残し、なつめに対してはアイヌ人であった妻の形見である「タマサイ」を託していた。「遺言」のようなそんな十兵衛の言葉に促されるまま、五郎もなつめも十兵衛の殴り込みを待つ2人の子供たちの家に赴くことになったのは当然だが、2人で一頭の馬に乗って十兵衛の子供たちと出会った2人のその後は・・・？

本作の翌日9月16日に私は、芥川賞作家・田中慎弥原作の『共鳴』を青山真治監督が映画化した『共鳴』（13年）を観た。そのクリスマスは、17歳の主人公・遠馬の母親による父親殺しの展開だが、その一部始終をしっかりと目撃した遠馬が帰るところは？ それは刑務所に入る母親の後を継ぐ魚屋の店だが、既にそこには父親から暴行を受けながらも立ち直ろうとする遠馬の彼女・千種が母親と同じように働いていた。つまり青山真治監督は、性行為の時に相手の女を殴りつけながら、自分の快感だけを追い求める父親は死ぬしかないとなしながらも、その血をひいた17歳の息子とその恋人の将来には絶望せず、別の生きザマを託したわけだ。そんな2人と同じような若い2人の今後の生きザマについて李監督が描く本作のラストシーンも全く同じだ。「あの人は、大切なものを私と五郎に託して、行ってしまった。」と語るなつめの続くナレーションとは？ そして、若い2人のこれから生きザマとは・・・？

20

13(平成25)年9月18日記